

マドゥスーダナ・サラスヴァティーの
主宰神論形成に関する一考察

眞鍋 智裕

南アジア古典学 第10号 別刷
South Asian Classical Studies, No. 11, pp. 147-168
Kyushu University, Fukuoka, JAPAN
2016年7月 発行

マドゥスーダナ・サラスヴァティーの主宰神論形成に関する一考察

眞鍋 智裕

1. 問題の所在

インド哲学学派の一つであるヴェーダーンタ学派の中で、最も成立の早いアドヴァイタ (Advaita, 不二一元論) 学派は、宇宙の根本原理ブラフマン (brahman) と個人の根本原理アートマン (ātman) の絶対的同一性を自力で悟ることによって解脱を得ることを最高の目的としている。そのため、解脱を得るために人格を持った主神 (主宰神, īśvara) を信仰する必要性はなく、殊解脱という観点から言えば、主宰神の果たす意義はそれほど重要ではない。アドヴァイタ学派の開祖シャンカラ (Śaṅkara, ca. -756-772¹) を始めとするアドヴァイタ学派の諸学匠も、伝統的に各々神に対する信仰を持っていたと考えられるが、アドヴァイタ学派の教義の中に主宰神の意義を積極的に位置付けようとすることはなかった²。

しかし 8 世紀以降、シャイヴァ・シッダーンタ派 (Śaiva Siddhānta) のサッディョージョーティス (Sadyojyotis, ca. 675-725³) や再認識派 (pratya bhijñā) のソーマナンダ (Somānanda, ca. 900-950⁴) 等が現れ、シヴァ神を信仰するシヴァ派がその教義体系を哲学的に権威付け、勢力を拡大していく。更に 12 世紀のラーマヌジャ (Rāmānuja, ca. 1017-1137⁵) 以降、ヴィシュヌ神を信仰するヴィシュヌ派がその教義体系をヴェーダーンタ哲学によって権威付け、その結果ヴィシュヌ派系諸ヴェーダーンタ学派が成立する。以上のようなインドの思想界の情勢に加え、同じ頃一神教であるイスラム王朝がインドに誕生する。以上のような時代の影響を受け、元来その最高の目的のために主宰神を必要としなかったアドヴァイタ学派も、次第に主宰神信仰を採り入れ有神論化していく。そのアドヴァイタ学派の有神論化に重要な役割を果たしたのが、16 世紀頃活躍したマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī) である。彼は、ヴィシュヌ派の一派であるバーガヴァタ (Bhāgavata) 派をアドヴァイタ教学によって基礎付けようとした。

¹ シャンカラのこの年代は、BSBh 執筆年代を限定しようとした Harimoto[2006] に基づく。

² 例えばアドヴァイタ学派の学匠の中で、サルヴァジュニャートマン (Sarvajñātman, ca. 9-10th?) はその著作 *Samkṣepasārīraka* において Padmanābha 神の信仰者だと述べている。See Veezhinathan[1972] Introduction p. 5. またシュリーハルシャ (Śrīharṣa, ca. 12th) は、Ardhanārīśvara 神を信仰していたとされている。See Jani[1957] p. 115.

³ Sanderson[2006] p. 76.

⁴ Sanderson[2012-2013] p. 74.

⁵ 前田[1980] p. 19.

ところでマドゥスーダナは、アドヴァイタ教学の中にヴィシュヌ派という有神論教義を取り込むに当たり、ヴィシュヌ神だけではなく、当時有力であった様々な神格を彼の主宰神論に採り入れ、位置付けようとしている。本稿では、マドゥスーダナがアドヴァイタ学派の立場から著した *Siddhāntabindu* (SB) とヴィシュヌ派の立場から著した *Īśvarapratipatti prakāśa* (ĪPP)⁶ に見られる最高神、即ち主宰神論に焦点をあて、彼がどのような発想に基づき様々な神格を採り入れ、彼の主宰神論を形成していったのかを明らかにしたい。

2. *Siddhāntabindu* に見られる主宰神論

SB は、シャンカラに帰せられている著作 *Daśaśloki* に対する註釈書であり、アドヴァイタ学派の綱要書の体裁をとっている。SB においてマドゥスーダナは、全世界を「見る者」(dṛś; 主観) と「見られるもの」(dṛśya; 客観) とに二分し、更に「見る者」を「主宰神」(īśvara), 「命我」(jīva, 個我), 「目撃者」(sākṣin) に三分する。

Text 1 SB 349, 2-372, 3: tatra dṛkpadārtha ātmā pāramārthika ekaḥ sarvagaikarūpo 'py aupādhikabhedena trividhaḥ, īśvaro jīvas sākṣī ceti. tatra kāraṇībhūtājñānopādhir īśvaraḥ. antaḥkaraṇatatsamśkāravacchinnājñānopahito jīvaḥ. ... sākṣī tu sarvānusamdhātā sarvānugatas turīyākhyā ekavidha eva. tatropādhibhedanāpi na kvacid bhedaḥ. tadupādher ekarūpatvāt.

この「見る者と見られるものの」うち、見る者という語の対象 (padārtha, 項目⁷) は、アートマンであり、勝義的なものとしては (pāramārthika) 唯一者 (eka)

⁶ この ĪPP に関して、S. Gupta 女史はその文章スタイルを問題視し、マドゥスーダナの真作であるかどうか疑わしいとしている。See Gupta[2006] p. 10. また G. Pellegrini 氏は、ĪPP には直接的な他のマドゥスーダナの著作への言及が見られないこと等から、ĪPP がマドゥスーダナの著作かどうかということは未解決の問題としている。See Pellegrini[2014] p. 286, fn. 28. しかし筆者は、以下の点から ĪPP はマドゥスーダナの真作と見做して差支えないと考えている。即ち、ĪPP の内容はマドゥスーダナの PP や *Siddhāntabindu* (SB) と一致する点、また ĪPP には、マドゥスーダナの著作以外では言及されないヴォーパデーヴァ (Vopadeva or Bopadeva, ca. 12-13th) 説が見られる点である。しかし、現段階では ĪPP がマドゥスーダナの本真作であると断定することは出来ない。しかし、ĪPP に見られる学説はマドゥスーダナのものとも一致するため、少なくともマドゥスーダナの思想を解明するための二次資料として使用することが出来ると思う。ĪPP には以上のような問題があるが、本稿では ĪPP はマドゥスーダナの本真作であるという立場を採る。

⁷ この padārtha という語は、實在 (vastu) に対して「語の対象としての存在」、その意味で「項目」といった位のニュアンスで使用されていると考えられる。

であり、一切に遍満し、かつ、唯一のあり方を有する (sarvagaikarūpo) けれども、限定的条件による違い (aupādhikabheda) によって三様となる。[即ち] 主宰神、命我、目撃者である。そのうち、主宰神とは、[現象世界の] 原因たる無知 (ajñāna) を限定的条件とするものである。命我とは、内官 (antaḥkaraṇa) とその (内官の) 潜勢力 (saṃskāra) によって限定された (avacchinna) 無知に制約されたものである。……一方、目撃者は、一切の確認者 (anusamdhātṛ) であり、一切に随伴する者 (anugata) であり、第四位 (turīya) と呼ばれる者であり、一様のみのも (ekavidha) である。それ (目撃者) には、限定的条件の違いによっても、如何なる場合にも違いはない。その (目撃者の) 限定的条件は一つのあり方を有するから。

ここでは、見る者とはアートマンのことであり、そのアートマンは勝義的なものとしては唯一者であり、一切に遍満する者とされている。以上のことは、このアートマンは最高のアートマンであること、即ち絶対者ブラフマンと同一のものであることを示している。しかし、そのアートマンが、限定的条件の違いによって三様に区別されると言うのである。その三者が主宰神、命我、目撃者である。

では、そのアートマンに付加される三者を区別する限定的条件とは何であろうか。先ず、「現象世界の原因⁸である無知」を限定的条件として付加されることで、アートマンは主宰神となる。続いて、「内官とその内官の潜勢力によって限定された無知」を限定的条件として付加されることで、アートマンは命我となるのである。ここで、内官とその内官の潜勢力によって限定された無知とは、無知がその転現である内官とその内官の潜勢力によって特殊化された状態を述べていると考えられる。しかし、アートマンを目撃者となす限定的条件が如何なるものであるかは述べられていない。ただ、目撃者の有する限定的条件は一つのあり方をしていて述べられているだけである。この目撃者の有する限定的条件は、註釈によると「原像であること」(bimbatva) であると述べられている⁹。以上のような限定的条件の違いによって、見る者であるアートマンは、主宰神、命我、目撃者という三者の姿を取るのである。

⁸ この「原因」(*kāraṇa) とは、質料因を指す。SB では「見られるもの」の解説において、この原因である無知 (無明) から現象世界が展開していく次第が説かれる。See SB 372, 3-395, 1.

⁹ ナーラーヤナ・ティールタ (Nārāyaṇa Tīrtha, ca. 18th) による *Nārāyaṇī* (Nā, or *Laghuvyākhyā*) で以下のように註が付されている。See Nā 372, 18: **upādhibhedenāpīti. bimbatvopahitasya sā-kṣitvapakṣa iti śeṣaḥ** (限定的条件の違いによっても, [以下を註釈する]. 原像であることによって制約されたものが目撃者であるという立場において, と補われる)。

ここで、本稿の主題である主宰神に関して述べると次のようになろう。主宰神とは、限定的条件が付加されることによって最高のアートマンが取る姿である。更に、その主宰神は、現象世界の原因である無知を限定的条件としている。

そしてSBでは、この主宰神も更に三つの姿を取ることが説かれる。そのことを以下に確認したい。

Text 2 SB 350, 3-351, 2: *tatreśvaro 'pi trividhaḥ, svopādhibhūtāvidyāguṇatrayabhedena viṣṇubrahmarudrabhedāt. kāraṇībhūtasattvaguṇāvacinno viṣṇuḥ pālayitā. kāraṇībhūtaraja-upahito¹⁰ brahmā sraṣṭā. hiraṇyagarbhas tu mahābhūtakāraṇatvābhāvāt na brahmā, tathāpi sthūlabhūtasraṣṭṛtvāt kvacid brahmety upacaryate. kāraṇībhūta-tama-upahito¹¹ rudraḥ saṃhartā.*

この（主宰神、命我、目撃者の）うち主宰神も三様である。自らの限定的条件である無明の三つの属性の違いによって、ヴィシュヌ〔神〕、ブラフマー〔神〕、ルドラ〔神〕の違いがあるから。原因（無明）の純質性（*sattvaguṇa*）に限定された者がヴィシュヌ〔神〕であり、維持者（*pālayitr*）である。原因（無明）の激質（*rajas*）によって制約された者がブラフマー〔神〕であり、創出者（*sraṣṭṛ*）である。しかし、ヒラニヤガルバは、〔微細な〕大元素の原因ではないので、ブラフマー〔神〕ではない。そのようであっても、粗大な元素の創出者であるので、或る時にブラフマー〔神〕と比喩的に言われる¹²。原因（無明）の暗質（*tamas*）によって制約された者がルドラ〔神〕であり、破壊者（*saṃhartṛ*）である。

主宰神は、その限定的条件である無明（Text 1 では無知）の三つの属性の違いによって、ヴィシュヌ神、ブラフマー神、ルドラ神という三つの姿を取るというのである。その無明の三つの属性の違いとは、純質、激質、暗質である。主宰神が、この無明の純質という属性によって限定された場合に、現象世界の維持者であるヴィシュヌ神となり、激質という属性によって制約された場合に、現象世界の創出者であるブラフマー神となり、暗質という属性によって制約された場合に、現象世界の破壊者であるルドラ神、即ちシヴァ神となる、というのである。

¹⁰ °रजउपहितो.

¹¹ °तमउपहितो.

¹² ここでヒラニヤガルバとブラフマー神との関係が説かれているが、この箇所を含むマドゥスーダナの著作におけるヒラニヤガルバの位置付けに関して、別の機会に詳細に検討する予定である。

以上のように、一つの神格がヴィシュヌ神、ブラフマー神、シヴァ神となり、それぞれ現象世界の維持、創造、破壊を司る、という考え方は「三神一体」(trimūrti) 説と呼ばれている。この説はその淵源を古ウパニシャッドに有する伝統的な考え方であり、現在でもヒンドゥー教徒によって一般的に語られている説であるが¹³、マドゥスーダナはこの「三神一体説」をアドヴァイタ教学における主宰神説として採り入れたのである。これは、当時有力であったヴィシュヌ神、シヴァ神、また伝統的に高位の神格であるブラフマー神を、アドヴァイタ教学の中に統一的に位置付けるために行った操作であると考えられる。

また、無明の三つの属性という点に関して言えば、この三つの属性はサーンキヤ思想における三属性 (triguṇa) 説を採り入れたものである。サーンキヤ学派で

¹³ 三神一体説やそれぞれの神格と三属性の対応は、*Maitryupaniṣad* (MaiUp) 5.2 に見られる。See MaiUp 72, 3-74, 1: atha yo ha khalu vāvāsya tāmaso 'ṁśo 'sau sa brahmacāriṇo yo 'yaṁ rudraḥ. atha yo ha khalu vāvāsya rājaso 'ṁśo 'sau sa brahmacāriṇo yo 'yaṁ brahmā. atha yo ha khalu vāvāsya sāttviko 'ṁśo 'sau sa brahmacāriṇo yo 'yaṁ viṣṇuḥ (また、実に確かに、彼(最高者)の暗質に属するその部分は、梵行者達よ、ルドラ[神]である。また、実に確かに、彼の激質に属するその部分は、梵行者達よ、ブラフマー[神]である。また、実に確かに、彼の純質に属するその部分は、梵行者達よ、ヴィシュヌ[神]である)。

また、この「三神一体説」は *Bhāgavatapurāṇa* (BhP) に採り入れられて「属性による化身」(guṇāvatāra) と言われている。See BhP 1.2.23: sattvaṁ rajas tama iti prakṛter guṇās tair yuktāḥ paramapuruṣa eka ihāsya dhatte / sthityādaye harivirīñcīhareti saṁjñāḥ śreyāṁsi tatra khalu sattvatanor nṛṇām (sic: nṛṇām?) syuḥ (純質、激質、暗質とは、原質の[三]属性であり、それらと結合した最高のプルシャたる唯一者が、ここでこの[世界の]維持等のために、ハリ(ヴィシュヌ)[神]、ヴィリンチ(ブラフマー)[神]、ハラ(シヴァ)[神]という名称を得る。その[三神]のうち、周知のように、諸の人間の幸福は純質[から成る]身体から生じる); 3.7.28ab: guṇāvatārair viśvasya sargasthityapyayāśrayam (諸の属性による化身によって、一切のものの創出と維持と帰滅の拠所となる)。また Sheridan[1986] pp. 62f 参照。

Nā では、この「三神一体説」が「部分による化身」(aṁśāvatāra) に対して「属性による化身」と呼ばれている。See Nā 366, 20-23: guṇāvatārāṇām brahmaviṣṇvādīnām akhilaśaktyāvīrbhāvakatvād guṇāvatāratvavyapadeśaḥ, matsyādyavatārāṇām tv alpaśaktyāvīrbhāvakatvād aṁśāvatāratva(conj.: daśāvatāratva^{sic})vyapadeśaḥ, guṇāvatārāṁśāvatārābhyām bhagavata evānantaśaktyāvīrbhāvaḥ sarvadeti vivekaḥ (属性による諸の化身であるブラフマー[神]、ヴィシュヌ[神]等は、全ての能力を現し出す者であるので、属性による化身という名称(vyapadeśa)がある。一方、魚等という諸の化身は、僅かな能力を現し出す者であるので、部分による化身という名称がある。属性による化身と部分による化身(aṁśāvatāra)によって、主のみから、無限の能力の顕現が常にある、という[属性による化身と部分による化身という]識別がある)。

マドゥスーダナ自身がウパニシャッド的な「三神一体説」と BhP の「属性としての化身」を区別していたかどうかは分からない。しかし、SB はアドヴァイタ学派の綱要書であることを考えると、恐らく典拠を挙げるとすれば MaiUp を挙げるだろう。

は現象世界の質料因である原質(*prakṛti*)がこの三属性から成ると考えられている。アドヴァイタ学派においても、初期は異なっていたが、次第に無明やマーヤー(幻力)が原質と同一視され、またそれが三属性から成ると考えられるようになった。マドゥスーダナに先行するヴィディヤーラニヤ (*Vidyāranya*, ca. 14th) の *Pañcadaśī* (PD) やサダーナンダ (*Sadānanda*, ca. 1500) の *Vedāntasāra* (VeS) に既にその考え方が見られる¹⁴。また、主宰神と三属性説の関係で考えた場合、聖典 *Bhagavadgītā* (BhG) にクリシュナ神のマーヤーも三属性から成ると説かれており、また聖典 *Bhāgavatapurāṇa* (BhP) でも原質が三属性から成ると説かれている¹⁵。そのため SB は、無神論的なサーンキヤ学派からの影響というよりは、BhG や BhP に見られる有神論的サーンキヤ説からの影響を受けていると考えた方がよいかもしれない。

続いて SB では、主宰神はヴィシュヌ神、ブラフマー神、ルドラ神(シヴァ神)という男神の姿だけでなく、女神の姿や無限の化身の姿をも取ると述べられる。

Text 3 SB 351, 3-366, 2: *evaṃ caikasyaiva caturbhūjacaturmukhapañcamukhādyāḥ pumākārāḥ, śrībhāratībhavānyādyāś ca stryākārāḥ, anye ca matsyakūrmādayo 'nantāvatārā līlayaivāvirbhavanti bhaktānugrahārtham ity avadheyam.*

そして以上のように、唯一に他ならない者の、四つの腕を持つ者 (*caturbhūja*, ヴィシュヌ神)、四つの顔を持つ者 (*caturmukha*, ブラフマー神)、五つの顔を持つ者 (*pañcamukha*, シヴァ神) 等が男性の姿である。そして、シュリー (ラ

¹⁴ マーヤーが原質であるということに関しては以下の PD を参照。See PD 6.123 (= *Śvetāśvataropaniṣad* 4.10): *māyāṃ tu prakṛtiṃ vidyān māyinaṃ tu mahēśvaram / asyāvayavabhūtais tu vyāptāṃ sarvam idaṃ jagat //123//* (一方、マーヤーを原質であると、マーヤーの保持者を偉大な主宰神であると知るべきである。一方、この一切の世界は、彼の諸部分によって充たされている)。また、そのマーヤー或いは無知が三属性から成るものであることは以下の VeS を参照。See VeS 21, 31f.: *ajñānaṃ tu sadasadbhyāṃ anirvacanīyaṃ triguṇātmakam jñānavirodhi bhāvarūpaṃ yatkiṃcid iti vadanti* (一方、無知とは、有とも非有とも述べられ得ない、三属性を本性とする、知と相反する、存在をあり方とする或るものである、と [或る者達は] 言う)。

¹⁵ See BhG 7.12-14: *ye caiva sāttvikā bhāvā rājasās tāmasās ca ye / matta eveti tān viddhi na tv ahaṃ teṣu te mayi //12// tribhir guṇamayair bhāvair ebhiḥ sarvam idaṃ jagat / mohitaṃ nābhijānāti mām ebhyaḥ param avyayam //13// daivī hy eṣā guṇamayī mama māyā duratyayā / mām eva ye prapadyante māyām etāṃ taranti te //14//* (純質の様態と激質的 [様態] と暗質的 [様態], それらを私のみから [生じると] 知れ。しかし、私はそれらの中になく、それらが私の中にある。この三つの属性からなる様態によって、この一切の世界は迷わされ、これら (三つの属性) よりも優れ、不変である私を理解しない。実に、私の、この属性からなる神的なマーヤーは越え難い。私にのみ頼る者達は、このマーヤーを越える)。BhP に関しては fn. 13 参照。

クシュミー女神), パーラティー (サラスヴァティー女神), バヴァーニー (パールヴァティー女神) 等が女性の姿である。また, [以上の神格とは] 別の, 魚 (matsya), 亀 (kūrma) 等の無限の化身 (avatāra) が, 当に戯れに, 信愛者 (bhakta) への恩恵 (anugraha) の為に現れる, と理解されるべきである。

上述の通り, 主宰神は唯一であるが, その限定的条件である無明の三属性の違いによって, ヴィシュヌ神, ブラフマー神, シヴァ神という三つの姿をとって現れる。しかし, これらは主宰神の男性の姿である。一方この Text 3 では, 主宰神はその男神に対応する女神の姿をも取ることが述べられている。それは即ち, 男性神の各々の妃とされるラクシュミー女神, サラスヴァティー女神, パールヴァティー女神の三女神である。また, 特にヴィシュヌ派の教義において, 最高神ヴィシュヌが人間界に下る (ava√tṛ) 際に魚や亀等の様々な姿を取るが, その姿を化身 (avatāra) と言う。ここでマドゥスーダナは, その様々な化身も, 唯一の主宰神が信愛者への恩恵のために取った姿であると言うのである。

以上のようにマドゥスーダナは, 女神も化身も唯一の主宰神が取った姿と主張している。SB におけるこの記述は, 男性三神だけでなく, 女神を最高神として信仰するシャクティ派やヴィシュヌ派の化身説をも, アドヴァイタ教説における唯一の主宰神の下に統合しようとしたもの, と解することが出来よう。

3. *Īśvarapratipattiprakāśa* に紹介される主宰神論

続いて ĪPP に見られる主宰神論を検討していく。ĪPP は, 諸哲学学派の構想する最高神 (parameśvara) 説を取り上げ, それらを批判し, マドゥスーダナの主張する最高神説が正しいものであることを顕示しようとした著作である。しかし, 本稿で扱う以下の箇所はマドゥスーダナの自説が説かれたものではない。ĪPP においてマドゥスーダナは, 諸ウパニシャッドを根拠に最高神 (parameśvara) の存在することを顕示する。その後, その最高神とは如何なる存在であるかを論じるが, その際に先ず, 彼が影響を受けたと考えられるヴィシュヌ派の修辞学者ヴォーパデーヴァ (Vopadeva or Bopadeva, ca. 12-13th) の主宰神論とシヴァの教義体系における主宰神論とを提示する。この箇所が既に検討した SB の主宰神論と密接な関係を持つと考えられる。そのため, 以下に該当箇所を検討する。

Text 4 ĪPP 7, 7-13: tatra pañcadhā viṣṇur iti muktāphalakārāḥ. tathā hi — sākāranirākārabhedena prathamam dvidhā. tatra nirākara ekarūpa eva. sākāras caturdhā — puruṣo brahmā viṣṇur maheśvaraś ceti. evam eva śivatantre vyaktam — brahmā viṣṇur mahādeva Īśvaraś ca sadāśiva iti.

その点（主宰神の特殊性）に関して、ヴィシュヌ [神] は五様である、とムクターパラ作者（ヴォーパデーヴァ）は [述べられている]。即ち、第一に、有形相（sākāra）な [ヴィシュヌ神] と無形相（nirākāra）な [ヴィシュヌ神] の違いによって、[ヴィシュヌ神は] 二様である。そのうち、無形相な [ヴィシュヌ神] は、一つの姿のみを有する。有形相な [ヴィシュヌ神] は、プルシャ、ブラフマー [神]、ヴィシュヌ [神]、マヘーシュヴァラ [神] とで四様である。シヴァの教義体系¹⁶において、全く同様に明らかにされている。「サ

¹⁶ この「シヴァの教義体系において」（sivatantre）という語が、具体的に何を指示しているのか、という点は明確には分からない。というのも、ここに挙げられている五神が一組となって見られる文献が管見では未だ不明であるからである。現時点では、以下の *Agnipurāna* (AP) か *Atharvaśikhopaniṣad* (AŚUp), 特に AŚUp が関連しているのではないかと予想している。その点に関して以下に簡単に考察する。

先ず、AP には以下のような記述が見られる。See AP 92.50ab: brahmā viṣṇuṣ tathā rudra īśvaraś ca sadāśivaḥ / ete ca pañca mūrtiśā yaśṭavyās tāsu pūrvavat // (同様に、ブラフマー [神]、ヴィシュヌ [神]、ルドラ [神]、主宰神、サダーシヴァ [神] がおり、これら五つの形態（mūrti）を有する支配者（īśa）達が、前の如くそれらにおいて崇拜されるべきである）。この AP は、五神の神名が基本的に ĪPP に見られるものと一致している。特に、主宰神とサダーシヴァ神が同時に見られる点は重要であると考え。また、AP 92 はシヴァ神の教説が説かれている箇所であり、ĪPP のシヴァの教義体系という記述とも一致する。しかし、この AP 92 は、内容的には ĪPP における議論とは関係がない。See Gangadharan[1984] pp. 266-272.

次に、AŚUp は新ウパニシャッドの中でもシヴァ派のウパニシャッドに分類されるものであり、シヴァの教義体系という ĪPP の記述に当てはまる。更に AŚUp には以下のような記述がある。See AŚUp 5, 2f.: brahmā viṣṇuś ca rudraś ca īśvaraḥ śiva eva ca. pañcadhā pañcadai-vatyāḥ praṇavaḥ paripaṭhyate (主宰神はブラフマー [神] とヴィシュヌ [神] とルドラ [神] であり、[それは] シヴァ [神] に他ならない。[以上の] 五神に献じられた聖音（praṇava）は五様に唱え上げられる）。この AŚUp の五神に関する記述は聖音 om の念想と関係したものであるが、SB にも聖音 om の念想が説かれている。See SB 439, 2-441, 2: evam adhyātmaṃ viśvaḥ, adhibhūtaṃ virāṭ, adhidaivaṃ viṣṇuḥ. adhyātmaṃ jāgrat, adhidaivam pālanam, adhibhūtaṃ sattvaguṇaḥ. evam adhyātmaṃ taijasaḥ, adhibhūtaṃ hiraṇyagarbhaḥ, adhidaivaṃ brahmā, adhyātmaṃ svapnaḥ, adhidaivaṃ sṛṣṭiḥ, adhibhūtaṃ rajoguṇaḥ. evam adhyātmaṃ prājñaḥ, adhibhūtam avyākṛtam, adhidaivaṃ rudraḥ, adhyātmaṃ suṣuptiḥ, adhidaivaṃ pralayaḥ, adhibhūtam tamoguṇaḥ. evam adhyātmādhidhivādadhidaivānām ekatvāt praṇavāvayavatrayasahitānām upahitānām aikyopāsanayā hiraṇyagarbhalokaprāptiḥ, antaḥkaraṇaśuddhidvārā kramamuktis ca (以上のように、[アートマンは] 個我に関しては（adhyātmaṃ）ヴィシュヴァ（viśva）であり、元素に関しては（adhibhūtam）ヴィラージュ（virāj）であり、神格に関しては（adhidaivam）ヴィシュヌ [神] である。個我に関しては覚醒 [状態]（jāgrat）であり、神格に関しては存続（pālanam）であり、元素に関しては純質性（sattvaguṇa）である。同様に、[アートマンは] 個我に関してはタイジャサ（taijasa）であり、元素に関してはヒラニヤガルバ（hiraṇyagarbha）であり、神格に関してはブラフマー [神] である。個我に関しては夢眠

ダーシヴァ [神] は、ブラフマー [神]、ヴィシュヌ [神]、マハーデーヴァ [神]、主宰神である」と。

[状態] (svapna) であり、神格に関しては創出 (sṛṣṭi) であり、元素に関しては激質性 (rajoguṇa) である。同様に、[アートマンは] 個我に関してはプラージュニャ (prājña) であり、元素に関しては未発現者 (avyākṛta) であり、神格に関してはルドラ [神] である。個我に関しては熟睡 [状態] (suṣṭi) であり、神格に関しては還滅 (pralaya) であり、元素に関しては暗質性 (tamoguṇa) である。以上のように、個我に関することと元素に関することと神格に関することとは同一のものであるので、聖音の三つの部分 (ア、ウ、ム) と結びついた諸の制約されたものが同一のものであることを念想することによって、ヒラニヤガルバの世界の獲得があり、そして内官が清浄となることによって漸進解脱がある)。この SB の記述は聖音の念想によって漸進解脱に達することを説いたものであるが、この SB に対するブラフマーナダ・サラスヴァティー (Brahmānanda Sarasvatī, ca. 18-19th) の註釈 *Nyāyaratnāvalī* (NR) には、SB の聖音 om の念想は *Nṛsimhottaratāpanīyopaniṣad* (NUTUp), *Māṇḍūkyopaniṣad* (MāṇḍUp), AŚUp とそれらに対する註釈に根拠があると述べられている。See NR 441, 6f.: nṛsimhatāpanyatharvaśikhāmāṇḍūkyādiśrutih tadbhāṣyaṃ cātra pramāṇaṃ bodhyam (『ヌリシンハ・[ウツタラ・] ターパニーヤ』, 『アタルヴァ・シカー』, 『マーンドゥーキヤ』等という天啓聖典と、それらに対する註釈が認識手段であると知られるべきである)。

更に、プシュパダanta (Puṣpadanta) というガンダルヴァ (gandharva) の著作とされる *Śivamahimnastotra* に対するマドゥスーダナの註釈 *Śivamahimnastotraṭikā* (ŚMST) では、聖音 om の部分であるア、ウ、ムに関して以下のような記述がある。See ŚMST 128, 1-5: rgvedo jāgradavasthā bhūri-loko brahmā ceti catuṣṭayam akārārthaḥ. tathā yajurvedaḥ svapnāvasthā bhuvāri-loko viṣṇuś ceti catuṣṭayam ukārārthaḥ. tathā sāmavedaḥ suṣṭyavasthā svarloko maheśvaraś ceti catuṣṭayam makārārthaḥ. idaṃ māṇḍūkyanṛsimhatāpanīyātharvaśikhādāv anyad apy uktam, gurūpadeśāj jñātavyam. atirahasyatvān neha saviśeṣam ucyate (リグ・ヴェーダ、覚醒状態、ブル世界、ブラフマー [神] という四つは、ア字の意味内容である。同様に、ヤジュル・ヴェーダ、夢眠状態、ブヴァル世界、ヴィシュヌ [神] という四つは、ウ字の意味内容である。同様に、サーマ・ヴェーダ、熟睡状態、スヴァル世界、マヘーシュヴァラ [神] という四つは、ム字の意味内容である。以上のことは、『マーンドゥーキヤ』, 『ヌリシンハ・[ウツタラ・] ターパニーヤ』, 『アタルヴァ・シカー』等において、別なようにも説かれている。[それは] 師の教示に基づいて知られるべきである。[それは] 非常に秘説であるので、ここでは特別には説かない)。以上のように、マドゥスーダナは、聖音 om とブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神との対応関係に関して AŚUp に言及することがある。ただし、AŚUp と ĪPP とでは五神の名前は厳密には一致しない。

しかし、五神の枠組みがあり、またマドゥスーダナも言及するシヴァ派の聖典が AŚUp であることから、マドゥスーダナが「シヴァの教義体系」(sivatātra) として言及している具体的な文献の第一候補は AŚUp ではないかと筆者は考えている。しかし、AŚUp には小本と大本の二系統があり、引用した記述が見られるのは小本のみであり、マドゥスーダナや SB の註釈者が知っていた AŚUp が小本だという確証は今のところ見出せていない。AŚUp に関しては阿部[1922] 参照。

マドゥスーダナに依れば、ヴォーパデーヴァは、最高神たるヴィシュヌ神が五様の姿を取る、と主張していると言うのである。先ず、ヴィシュヌ神は有形相な者と無形相な者との二者に分かれる。そのうち、無形相なヴィシュヌ神は一つの姿のみを有するが、一方、有形相なヴィシュヌ神は四つの姿を取ると言うのである。その四つとは、プルシャ、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、マヘーシュヴァアラ神である。このように、最高神ヴィシュヌの取る姿は、無形相なヴィシュヌ神という一つの姿と、有形相なヴィシュヌ神としての、プルシャ、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、マヘーシュヴァアラ神という四つの姿とで、合わせて五様となる。

ところで、ヴォーパデーヴァはヴィシュヌ派に属しているため、最高神はヴィシュヌ神を想定している。しかし、シヴァ派の教義でも、最高神に関してヴォーパデーヴァ説と全く同じように説かれていると言うのである。即ち、最高神シヴァは、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、マハーデーヴァ神、主宰神、サダーシヴァ神という五様の姿を取るのである。

しかし、この記述だけではシヴァの教義体系とヴォーパデーヴァの主宰神論がどのように同じであるのかは理解しづらい。続いて ĪPP では、以上のヴォーパデーヴァの説く五神とシヴァの教義体系における五神を対応させて、更に詳しく最高神論を述べている¹⁷。以下にその該当箇所を確認することによって、シヴァの教義体系における主宰神論とヴォーパデーヴァの主宰神論との共通点を明らかにしていきたい。

Text 5 ĪPP 7, 13-16: *tatra sadāśivo nirākāraś ceti nirupādhicaitanyasvarūpaḥ siddhaḥ ekaḥ. puruṣa īśvaraś ceti guṇatrayāvacchinnamāyopādhir ekaḥ*¹⁸, *rajoguṇāvacchinno brahmā, sattvaguṇāvacchinno viṣṇuḥ, tamoguṇāvacchinno rudra iti.*

その（ヴォーパデーヴァの説く五神とシヴァの教義体系における五神の）うち、サダーシヴァ〔神〕と無形相な〔ヴィシュヌ神〕とは、限定的条件を欠いた（*nirupādhi*）、精神性を本質とする者（*caitanyasvarūpa*）として成立している、唯一者である。そしてプルシャと主宰神とは、三属性によって限定され

¹⁷ これ以降の ĪPP に関して、Text 4 の "sivatantre" 以下は、シヴァの教義体系の解説のみを行っているという解釈も可能である。しかし、以下の二点から、Text 5 の ĪPP は、MPh 説とシヴァの教義体系とを対応させて解説していると解釈した。先ず、シヴァの教義体系として Text 5 に見られるような説が説かれているものが管見の限り見出せないという点である。また Text 5 に見られる記述とほぼ一致する記述がヴォーパデーヴァの MPh に見られるという点である。シヴァの教義体系には五神の枠組みのみがあり、ĪPP のような解釈は存在せず、それを ĪPP では MPh の教義に当てはめて解釈を行っているのではないか、ということが考えられる。MPh の記述に関しては Text 6 参照。

¹⁸ ... *siddhaḥ ekaḥ. puruṣa īśvaraś ceti ... conj]* ... *siddhaḥ ekaḥ puruṣas.*^{sic} *īśvaraś ceti ...*

たマーヤーを限定的条件とする一者である。[そしてそのプルシャと主宰神とに関して、三属性のうち] 激質に限定された者がブラフマー [神] であり、純質に限定された者がヴィシュヌ [神] であり、暗質に限定された者がルドラ [神] である、と。

ヴォーパデーヴァの説く五神と、シヴァの教義体系における五神のうち、先ずサダーシヴァ神と無形相なヴィシュヌ神とが対応するものとして説かれている。即ち、この二神は、それぞれの立場において、限定的条件を欠いた、精神性を本質とする者として成立している唯一者であるというのである。続いて、ヴォーパデーヴァの有形相なヴィシュヌ神の筆頭に挙げられたプルシャと、シヴァの教義体系における主宰神が対応するものとして挙げられる。そしてそれら二神は、それぞれの立場において、三属性によって限定されたマーヤーを限定的条件とする一者であると言われている。ここで、サダーシヴァ神と無形相なヴィシュヌ神と、更にプルシャと主宰神との二組は、前者が限定的条件を欠いている唯一者、後者が限定的条件を有する一者と、限定的条件の有無という点で明確に対比され、前者が後者に対してより根源的な存在であることが暗に示されていると考えられる¹⁹。

更に後者、即ちプルシャと主宰神に関して、その限定的条件であるマーヤーの三属性のうちの激質に限定された場合、そのプルシャ或いは主宰神はブラフマー神となり、その純質に限定された場合にはヴィシュヌ神、更にその暗質に限定された場合にはルドラ神となる、ということが述べられている。ここで、ヴォーパデーヴァ説のうちのマヘーシュヴァーラ神とシヴァの教義体系のうちのマハーデーヴァ神がルドラ神となっているが、これらはいずれもシヴァ神の別名であり、同一の神格シヴァを指している。

以上のように、ĪPPに見られるヴォーパデーヴァの最高神論とシヴァの教義体系における最高神論は、限定的条件を有しない唯一者と限定的条件を有する一者に関してその神格の名称が各々異なるものの、共に最高神が五様の姿を有していること、そしてその五様の姿の構造が共通していることが理解出来る。

以上はマドゥスーダナの紹介するヴォーパデーヴァの主宰神論であるが、ヴォーパデーヴァの著作 *Muktāphala* (MPh) に、Text 5 に対応する議論が確かに見ら

¹⁹ サダーシヴァ神と無形相なヴィシュヌ神に関しては、限定的条件を持たない、そのみの根源的な存在というニュアンスを出すために、eka に対して「唯一者」という訳を与えた。そのことと対照して、プルシャと主宰神に関しては、確かに唯一の神格ではあるが、限定的条件を有することから、eka に対してより次元の低いニュアンスを出すために「一者」という訳語を与えた。

れる。それは以下のようなものである。

Text 6 MPh 7, 1-3: sa dvedhā nirākāraḥ sākāraś ca. anavacchinnaṃ caitanyaṃ²⁰ nirākāraḥ, sattvāvacchinnaṃ caitanyaṃ sākāraḥ. sa ca caturdhā, rajastamobhyāṃ yukte sattve puruṣaḥ, rajasā brahmā, tamasā rudraḥ, śuddhe viṣṇur eva.

彼（ヴィシュヌ神）は無形相な〔ヴィシュヌ神〕と有形相な〔ヴィシュヌ神〕との二様である。限定されていない精神性が無形相な〔ヴィシュヌ神〕である。純質に限定された精神性が有形相な〔ヴィシュヌ神〕である。そして彼（有形相なヴィシュヌ神）は四様である。純質が激質と暗質と結合している場合、プルシャである。〔純質が〕激質と〔結合している場合、〕ブラフマー〔神〕である。〔純質が〕暗質と〔結合している場合、〕ルドラ〔神〕である。清浄な場合（精神性が純質のみに限定されている場合）ヴィシュヌ〔神〕に他ならない。

この MPh でも、IPP と同様に、最高神たるヴィシュヌ神が先ず無形相な姿と有形相な姿に二分されている。無形相なヴィシュヌ神が限定されない精神性であるところも IPP の記述と一致する。しかし、この MPh では、有形相なヴィシュヌ神に関する記述が IPP とは大枠は一緒だが、細かい点で異なっている。IPP では有形相なヴィシュヌ神は三属性に限定されたマーヤーを限定的条件とするとされているが、MPh では、先ず最高神ヴィシュヌが純質に²¹限定されると言われている。そして、その最高神ヴィシュヌを限定している純質が、更に三属性の何れかと結合することによって、有形相なヴィシュヌ神は四様の姿を取るとされる。即ち、純質が他の二属性と結合した場合、プルシャとなる。また、純質と激質とが結合した場合、ブラフマー神となる。また、純質と暗質とが結合した場合、ルドラ神となる。そして、純質のみに限定されている場合、ヴィシュヌ神の姿を取るのである。このように、MPh においては、先ず精神性が純質に限定されることが前提とされている。しかし、IPP ではそのような前提は見られない。また、IPP においては、プルシャが一者と呼ばれ、四様の姿を取る有形相なヴィシュヌ神の中でも、プルシャがブラフマー神、ヴィシュヌ神、ルドラ神の三神に変容する、というような階層構図が見られたが、MPh では、純質のみに限定されたヴィシュ

²⁰ anavacchinnaṃ caitanyaṃ conj] avacchinnacaitanyam. Cf. sattvāvacchinnaṃ caitanyaṃ sākāraḥ.

²¹ MPh には三属性のみが言及され、IPP のようにそれがマーヤーの三属性なのかどうかという記述が存在しない。MPh に対するヘーマードリ（Hemādri, ca. 13th）による註釈 *Kaivalyadīpikā*（KD）にも三属性が挙げられているのみである。

ヌ神が基本となり、その他激質と暗質の両者あるいは何れかと結合することによって他の神格に変容するといった、ヴィシュヌ神を頂点とする階層構造がうかがわれる。

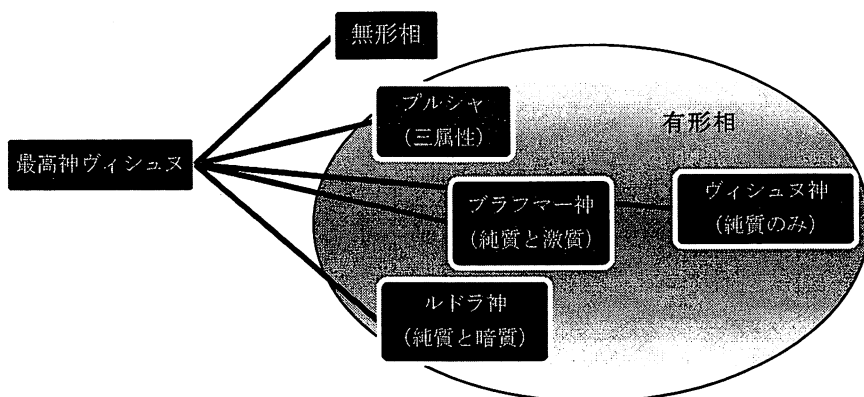
以上のような相違点があるとはいえ、MPH の記述から、IPP に紹介されているヴォーパデーヴァ説は基本的にはヴォーパデーヴァ自身の説に基づいたものであると考えられる。マドゥスーダナは、ヴォーパデーヴァの著作に註を付ける²²等、ヴォーパデーヴァの思想をよく知っていたと考えられることもこの点を裏付けると考える。

以上、IPP に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論とシヴァの教義体系における主宰神論を見てきたが、これらの主宰神論、特に有形相の最高神の四様の姿に関する記述は、三神一体説の体裁を採っている点で Text 2 における SB の主宰神論と類似していることが指摘出来る。

4. *Īśvarapratipattiprakāśa* における MPH の主宰神論改変に関する考察

既に確認した通り、IPP に紹介されているヴォーパデーヴァの主宰神論と MPH に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論は少し異なっていた。本節では、SB, IPP, MPH の主宰神論を比較検討し、マドゥスーダナが、ヴォーパデーヴァ説とシヴァの教義体系とにおける主宰神論をアドヴァイタ教学の下に統合するため、IPP において MPH の主宰神論を改変したということを指摘したい。先ず MPH の構図を図示すると図 1 のようになろう。尚、神格の下の括弧内は、その神格の限定的条件を表している。

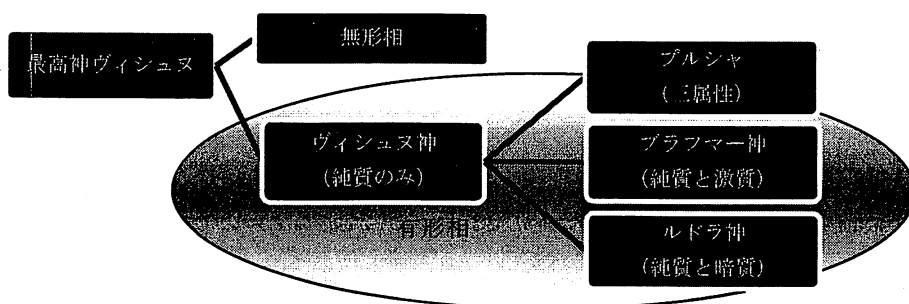
図 1 MPH に見られる主宰神論



²² マドゥスーダナは、ヴォーパデーヴァの著した BhP のインデックス的著作 *Harilīlāmṛta* (HLA) に註釈を著している。しかし、この註釈の真偽に関しても疑義が呈されている。See Raghavan[1978] pp. 122-126, Anand[2015] pp. 195f., fn. 534.

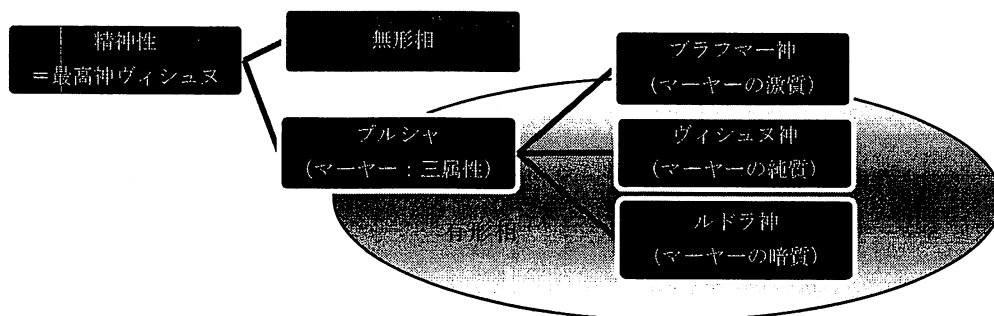
この図 1 は Text 6 の記述から直接導かれる図であるが、Text 6 では純質のみに限定された有形相なヴィシュヌ神が基本となり、そのヴィシュヌ神を頂点とする階層構造がうかがわれる。そのため、その点を踏まえて図を再構成すれば図 2 のようになる。

図 2 MPh に見られる主宰神論 (改訂)



次に、MPh との比較のために IPP に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論の構造を図示すると、図 3 のようになる。図 2 と図 3 を比較すると、基本的には一

図 3 IPP に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論



致しており、マドゥスーダナはかなり忠実にヴォーパデーヴァの説を紹介していると言える。しかし、決定的に異なっているのは、有形相な姿のヴィシュヌ神の位置とブルシャの位置が入れ替わっていることである。この違いは以下のように想定することが出来よう。

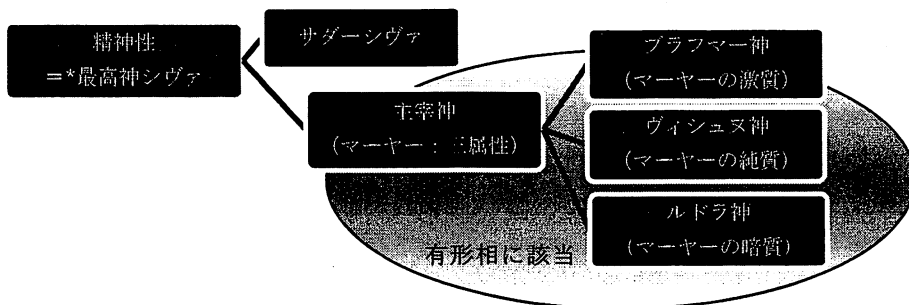
ヴォーパデーヴァは、BhP に見られる「三神一体説」を基に MPh に見られる主宰神論を構成したと考えられる²³。ただし、BhP では「最高のブルシャである唯一

²³ MPh は BhP の註釈的著作とされることから、ヴォーパデーヴァは、MaiUp の「三神一体説」というよりも、BhP の「属性による化身」に基づいてその主宰神論を構成していると考えられる。しかし、三属性が原質に属しているという記述が見られない点は、MaiUp の記述に近い。因みに、Raghavan[1978] ではヴォーパデーヴァが、Anand[2015] ではヴォ

者」がヴィシュヌ神，ブラフマー神，シヴァ神という三神の姿を取るとされる²⁴。しかし，バーガヴァタ派の聖典である BhP では，その三神のうち，純質と結合したヴィシュヌ神の優位も説かれている²⁵。ヴィシュヌ派の学匠であるヴォーパデーヴァは，この BhP のヴィシュヌ神優位の立場に従って，最高神ヴィシュヌの有形相な姿の四神格の中でも，やはりヴィシュヌ神を高位な位置に配置しているのだと考えられる。また，ヴィシュヌ神を中心に四神格を構成しているため，先ず有形相な神格の限定者として，三属性の中でもヴィシュヌ神に配当されている純質を挙げているのだとも考えられる。更に，その純質に限定された有形相なヴィシュヌ神を中心として，残りの二属性との結合関係如何により，他の三神格に変容する，と主張しているものと考えられる。以上のことから，ヴォーパデーヴァは，BhP に見られる三神一体説を前提としながらも，自身の主神ヴィシュヌを中心とした独特な三神一体説を主張したのだろう。

一方，IPP においてマドゥスーダナは，ヴォーパデーヴァとシヴァの教義体系を対応させて論じている（シヴァの教義体系における主宰神論は図 4 参照）。

図 4 IPP に見られるシヴァの教義体系の主宰神論



ーパデーヴァとヘーマードリがアドヴァイタ論者であったという興味深いことが提起されている。See Raghavan [19 78] p. 125, Anand[2015] pp. 195f., fn. 534. ヴォーパデーヴァとヘーマードリがアドヴァイタ論者であったかどうかに関しては，MPh, KD と HLA を詳細に検討する必要がある。

²⁴ See fn. 13.

²⁵ 「属性による化身」を述べた直後の BhP 1.2.24-25 において，純質と結びついたヴィシュヌ神の優位が述べられている。See BhP 1.2.24-25abc: pāṛthivād dāruṇo dhūmas tasmād agnis trayīmayāḥ / tamasas tu rajas tasmāt sattvaṃ yad brahmadarśanam // bhejire munayo 'thāgre bhagavantam adhokṣajam / sattvaṃ viśuddham (地元素から成る木から煙が [生じる]。それ [煙] から三ヴェーダから成る火が [生じる]。一方，暗質から激質が [生じる]。それ [激質] からブラフマンを見る純質が [生じる]。また太初において聖仙達は，清浄な純質である主アードクシャジャ (ヴィシュヌ神) を信愛した)。また Sheridan[1986] p. 64 参照。

また、SBにおける主宰神論と比較するために Text 1-2 の SB の議論を図 5 として提示する。

図 5 SBにおける「見る者」(drs)の構図

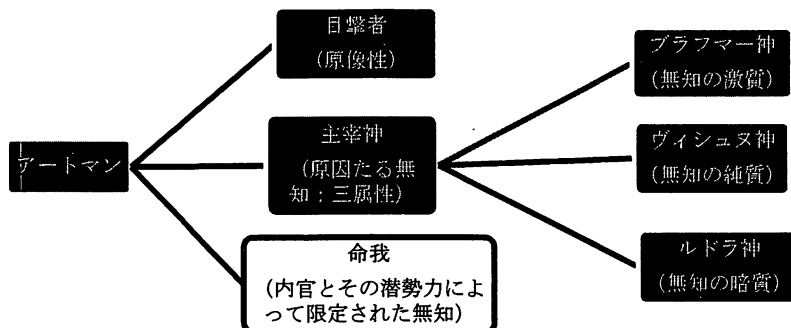


図 3, 4, 5 を比較してみると、SB における主宰神の階層構造と、IPP に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論やシヴァの教義体系における有形相な（或いは有形相に該当する）神格の階層構造が一致することが理解出来る。無知はマーヤーと同一視されることもあり²⁶、そのことを踏まえると、IPP に見られるヴォーパデーヴァの主宰神論において、主宰神に該当する神格がプルシャであることを除けば、両テキストの記述は一致している。また、精神性 (caitanya) は伝統的に絶対者ブラフマン、或いは最高のアートマンのことを指すため、最高のアートマン（精神性）が無知（マーヤー）の制約を受けて主宰神（プルシャ）の姿を取る、という構造も一致している。それ故、SB の主宰神論は、IPP に見られるヴォーパデーヴァとシヴァの教義体系における最高神の有形相な姿の理論と密接な関係があることが想定される。そして既に述べた通り、この SB の主宰神論と IPP の有形相な姿の主宰神論は、ある一つの神格がブラフマー神、ヴィシュヌ神、ルドラ神の姿を取るといふ、伝統的な三神一体説に則っていることが理解されよう。

以上のように、MPh における主宰神論と IPP におけるヴォーパデーヴァ説の主宰神論の違いは、MPh においてはヴィシュヌ神を中心とする独特な三神一体説が主張されており、一方 IPP では伝統的な三神一体説が説かれている、ということに由来している。では、マドゥスーダナは何故、IPP において MPh のヴォーパデーヴァ説を改変したのであろうか。それは、SB の主宰神論がそうであるように、アドヴァイタ教学においては、主宰神を制約するマーヤーは三属性から成るものだからであろう²⁷。そのため、純質のみに限定されたヴィシュヌ神ではなく、三属

²⁶ 中村[1996] p. 300 参照。

²⁷ See fn. 14.

性が全て揃っているプルシャ²⁸を一者たる有形相な神格として位置付けたのである²⁹。そしてそうすることによって、ĪPP では MPh に見られる独特な三神一体説ではなく、SB と一致する、伝統的な三神一体説が見られるのであろう³⁰。

ところで今度は、マドゥスーダナは何故、MPh のヴォーパデーヴァ説をアドヴァイタ教学に合わせるために改変する必要があったのか、という疑問が生じる。それは、ĪPP におけるヴォーパデーヴァ説とシヴァの教義体系とにおける無形相な姿の主宰神論と、SB における主宰神論とが一致しているように、アドヴァイタ教学化した主宰神論を主張することで、ヴィシュヌ派にもシヴァ派にも偏る³¹ことなく、両派を統合的にアドヴァイタ教学の下に吸収することが出来ると考えたからであろう。つまり、マドゥスーダナは、MPh におけるヴォーパデーヴァの主宰神論を ĪPP においてアドヴァイタ教学化し、それをシヴァの教義体系にも適合させることによって、ヴィシュヌ派だけでなく、シヴァ派をもアドヴァイタ教学によって統合しようとした、と考えられる³²。事実、ĪPP において提示されるマドゥスーダナ自身の主宰神論には、ヴォーパデーヴァの主宰神論とシヴァの教義体系における主宰神論が位置付けられている³³。

²⁸ 注意しなければならないのは、KD によれば、MPh におけるプルシャは、三属性を全て備えているけれども、三属性が均衡しているわけではなく、純質が最も優勢であることである。その点は原質と明確に異なる。See KD 7, 11f: *puruṣe sattvaṃ bahulam, rajas tamaś ca tadapekṣayā nūnam ity arthaḥ. na tu trīṇi samāny eva. trisāmyasya prakṛtilakṣaṇatvāt* (プルシャにおいて、純質が多い。激質と暗質は、それ(純質)に依存するので、より少ない、という意味である。しかし、三[属性の配分]が必ず等しいというのではない。三[属性の]均衡状態は原質の特徴だから)。おそらくマドゥスーダナは、プルシャに三属性が備わっていると述べられていることから、この三属性が均衡しているものと解釈し、ĪPP のように改変したのだと考えられる。

²⁹ しかし、アドヴァイタ学派内でも、VeS においては、主宰神は三属性が均衡状態になく、純質が最も優勢だと考えていたようである。See VeS 27, 1: *iyam samaṣṭir utkr̥ṣṭopādhitayā viśuddhasattvapradhānā* (この[無知の]総体は、最上者の限定的条件であるので、清浄な純質を主要なものとする)。中村[1996] p. 233 参照。

³⁰ このことは、マドゥスーダナは、MPh の主宰神論を、もとの BhP における「属性による化身」説に戻したとも言える。それはやはり、BhP の主宰神論の方が中立的なものであったからと考える。

³¹ ヴィシュヌ派とシヴァ派に関して中立の立場を採ったということは、Text 3 で見たように、マドゥスーダナは女神信仰をもアドヴァイタ学説の中に採り入れようとしていることから裏付けられる。

³² しかし、ĪPP においては、最終的なマドゥスーダナの主宰神論は、ヴィシュヌ派の一派であるパンチャラートラ派(Pāñcarātrika)のヴィューハ(vyūha)説に則ったものであり、その意味で最終的にはヴィシュヌ派の立場を採っている。See ĪPP 7, 17-8, 4.

³³ ĪPP におけるマドゥスーダナ自身の主宰神論と、ヴォーパデーヴァの主宰神論、シヴァ

5. 結論

以上のようにマドゥスーダナは、SBにおける主宰神に関して、三神一体説を採用した解釈を採っている。このマドゥスーダナの主宰神論は、三神一体説を採用していることから理解出来るように、ヴィシュヌ派にもシヴァ派にも偏らない中立の立場を採っている。またその主宰神論は、アドヴァイタ学派の伝統教学に基づいて構成されたものでもある。そしてマドゥスーダナは、そのような主宰神論をヴィシュヌ派やシヴァ派の主宰神論に適合させることによって、ヴィシュヌ派とシヴァ派をアドヴァイタ学派の教学の中に体系的に取り込んだと言える。

その上 Text 3 で見たように、マドゥスーダナは、三神一体説だけでなく、その各々の男神の妃である女神信仰や、ヴィシュヌ派で有力な化身説をも、一つの主宰神の変容という中立的な形でアドヴァイタ教学の中に吸収している。このような説はマドゥスーダナ以前のアドヴァイタ論者には見られない³⁴。以上のようなマドゥスーダナの主宰神論が彼以降のアドヴァイタ論者によって継承され³⁵、ヴィシュヌ派にもシヴァ派にも属さない、更には女神を崇拝するシャクティ派にも属さないスマールタ派が形成されていった³⁶のだと考えられる。

の教義体系における主宰神論との関係に関しては、眞鍋[2015] 参照。

³⁴ PD や VeS では、三神一体説や女神信仰等はその体系の中に採り入れられていない。See Mahādevan[1938] pp. 169-177, 中村[1996] 第 10 章。

³⁵ ダルマラージャ・アドゥヴァリーンドラ (Dharmarāja Adhvarīndra, ca. 17th) の *Vedāntaparibhāṣā* (VP) に、マドゥスーダナの主宰神論と同じものが見られる。See VP 33, 1f.: sa ca parameśvara eko 'pi svopādhibhūtamāyāniṣṭhasattvarajastamogūṇabhedena brahmaviṣṇumaheśvarādīśabdavācyatām bhajate (そして、その最高神は唯一であっても、自身の限定的条件であるマーヤーにある純質性、激質性、暗質性という違いによって、ブラフマー [神], ヴィシュヌ [神], マヘーシュヴァラ [神] 等という語によって述べられることを経験する)。佐藤[2005] pp. 260f. 参照。更に、サダーナンダ・カーシュミーラカ (Sadānanda Kāśmīraka, ca. 18th) の *Advaitabrahmasiddhi* (ABS) の「主宰神論」節は、ほぼそのまま SB 説が踏襲されている。See ABS 245, 2-19. ABS の主宰神論に関しては別の機会に論じる予定である。

³⁶ Nā では、Text 3 の化身説に対する註釈箇所、ヴィシュヌ派、シヴァ派、シャクティ派、スマールタ派に言及している。See Nā 366, 23-25: sa ca mahāviṣṇur eveti vaiṣṇavāḥ. paramaśiva iti śaivāḥ. paradevateti śāktāḥ. parameśvara eveti śuddhasmārtā iti saṃkṣepaḥ (そして、[化身される主である] 彼は、偉大なるヴィシュヌ [神] に他ならない、とヴィシュヌ派は [述べる]。最高者シヴァ [神] であるとシヴァ派は [述べる]。最高の女神であるとシャクティ派は [述べる]。最高神に他ならないと清浄なスマールタ派は [述べる]。以上のようにまとめられる)。この「最高神」(parameśvara) とは、SB の主宰神に該当すると考えられる。

参考文献

一次資料

- ABS *Advaitabrahmasiddhi* (Sadānanda Kāśmīraka): *Advaita Brahma Siddhi by Kāśmīraka Sadānanda Yati*. Ed. Vāman Shāstrī Upādhyāya. (Bibliotheca Indica New Series Nos. 661-698-715-747) Calcutta: Baptist Mission Press 1980.
- AP *Agnipurāṇa: Agnipurāṇam*. (Ānanda Āśrama Sanskrit Series 41) Pune: Ānanda Āśrama 1900.
- ASUp *Atharvaśikhopaniṣad: Upaniṣadāṃ samuccayaḥ*. (Ānanda Āśrama Sanskrit Series 29) pp. 1-5, Pune: Ānanda Āśrama 1895.
- BhG *Bhagavadgītā: Śrīmadbhagavadgītā with Śaṅkarabhāṣya*. (Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit Vol. II) Pūṇā: 1929 (5th Ed.: Vārāṇasī: Motilal Banarsidass 2004).
- BhP *Bhāgavatapurāṇa: The Śrīmadbhāgavatamahāpurāṇa (Text with English Translation, Notes and Index) Part I-III*. Ed. and Tr. Manmatha Nath Dutt. Delhi: Eastern Book Linkers 2009.
- ĪPP *Īśvarapratipattiprakāśa* (Madhusūdhanaśaravatī): *The Īśvarapratipattiprakāśa by Madhusūdanaśaravatī*. Ed. T. Gaṇapathi Sāstrī. (Trivandrum Sanskrit Series No. LXXIII) Trivandrum: The Superintendent, Government Press 1921.
- KD *Kaivalyadīpikā* (Hemādri): See MPH.
- MaiUp *Maitryupaniṣad: The Maitri or Mairtāyaṇīya Upanishad, with the Commentary of Rāmatīrtha*. Ed. and Tr. E. B. Cowell (Bibliotheca Indica Vol. 42) London: Bibliotheca Indica 1870.
- MPH *Muktāphala* (Vopadeva or Bopadeva): *Muktāphala of Vopadeva with Kaivalyadīpikā of Hemādri*. Revis. Ed. Durgamohan Bhattacharyya. (Calcutta Oriental Series No.5) Calcutta: the Calcutta Oriental Press, Ltd. 1944.
- Nā *Nārāyaṇī or Laghuvyākhyā* (Nārāyaṇa Tīrtha) : See SB.
- NR *Nyāyaratnāvalī* (Gauḍa Brahmānanda Śaravatī): See SB.
- PD *Pañcadaśī* (Vidyāraṇya): *Pañcadaśī of Vidyāraṇya Muni*. Hin. Tr. Pt. Rama Vattar Vidya Bhaskar. (The Vrajajivan Prachya Bharti Granthmala 78) Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan 2009.
- ŚMST *Śivamahimnastotraṭīkā* (Madhusūdana Śaravatī): *Śrīśiva Mahimna Stotra by Puṣpadantācārya, with a Commentary of Madhusūdana-Śaravatī, and five other Commentaries Pt. Śrī Nārāyaṇa Pati Śarma Tripāthī and Śakti-Mahimna-Stotra*. Ed. Śrī Nārāyaṇa Pati Śarma Tripāthī (The Kashi Sanskrit Series 21) Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sanstham 1924.

- SB *Siddhāntabindu* (Madhusūdana Sarasvatī): *Siddhāntabindu of Madhusūdana Sarasvatī: Being a Commentary on the Daśaślokī of Śaṅkarāchārya With two Commentaries Nyāya Ratnāvalī of Gaudabrahmānanda and Laghuvyākhyā of Nārāyaṇa Tīrtha*. Ed. Tryambakram Śāstrī Vedāntāchārya. (The Kashi Sanskrit Series 65) Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan 2nd Ed. 1989.
- VeS *Vedāntasāra* (Sadānanda): *Vedanta-Sara (The Essence of Vedanta) of Sadananda Yogindra*. Ed. and Tr. Swami Nikhilananda. Calcutta: Advaita Ashrama 1931 (10th Impr.: 1997).
- VP *Vedāntaparibhāṣā* (Dharmarāja Adhvarīndra): *Vedāntaparibhāṣā*. Ed. with Tr. S. S. Suryanarayana Sastri. (The Adyar Library Series Vol. 34) Chennai: 1942 (Repr.: 2003).

二次資料

Abe, Fumio (阿部文雄)

[1922] 「アタルヴ・シカー・ウパニシャッド [10]」高楠順次郎監修『ウパニシャッド全書 第二巻』pp. 95-103, 東方出版, 1922.

Anand, Venkatkrishnan

[2015] *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement*. Columbia: Columbia University 2015 (Doctoral Thesis, Unpublished). downloaded from: <http://academiccommons.columbia.edu/catalog/ac%3A189616>.

Dhole, Nanda Lal

[1899] *The Panchadasi of Srimad Vidyananya Swami*. Tr. (Sri Garib Das Oriental Series No. 317) Calcutta: Sri Satguru Publications 1899 (2nd Ed.); Delhi: 2008 (3rd Ed.).

Gangadharan, N.

[1984] *The Agni Purāṇa Part I*. Tr. (Ancient Indian Tradition and Mythology Series 27) Delhi: Motilal Banarsidass 1984.

Gupta, Sanjukta

[2006] *Advaita Vedānta and Vaiṣṇavism: The Philosophy of Madhusūdana Sarasvatī*. London and New York: Routledge 2006.

Harimoto, Kengo (張本研吾)

[2006] "The Date of Śaṅkara: Between the Cālukyas and the Rāṣṭrakūṭas", *Journal of Indological Studies (New title for Studies in the History of Indian Thought)* 18, Kyoto University 2006.

Jani, Arunoday Natvarlal

- [1957] *A Critical Study of Śrīharṣa's Naiṣadhīyacaritam*. (M. S. University of Baroda Research Series 2) Baroda: Oriental Institute 1957.
- Kamimura, Katsuhiko (上村勝彦)
 [1992] 『バガヴァッド・ギター』 岩波文庫, 1992.
- Mahādevan, T.M.P.
 [1938] *The Philosophy of Advaita*. Delhi: Bharatiya Kala Prakashan 1938 (1st Revised Ed.: 2006).
- Manabe, Tomohiro (眞鍋智裕)
 [2015] 「*Īśvarapratipattiprakāśa* における諸主宰神論の統合方法の解明」 *Waseda Rilas Journal* 3, 早稲田大学総合人文科学研究センター, 2015.
- Mayeda, Sengaku (前田専学)
 [1980] 『ヴェーダーンタの哲学——シャンカラを中心として——<サーラ叢書>24』 平楽寺書店, 1980.
- Modi, P. M.
 [1929] *Translation of Siddhanta Bindu: Being Madhusudana's Commentary on the Das'as'loki of S'ri S'ankaracharya*. Tr. Allahabad: Vohra Publishers & Distributors 1929 (Repr.: 1985).
- Nakamura, Hajime (中村元)
 [1996] 『中村元選集〔決定版〕第27巻 ヴェーダーンタ思想の展開』春秋社, 1996.
- Pellegrini, Gianni
 [2014] ""Old is Gold!" Madhusūdana Sarasvatī's Way of Referring to Earlier Textual Tradition", *Journal of Indian Philosophy* 43, Published online: Springer Science+Business Media Dordrecht 2014.
- Raghavan, V.
 [1978] "Bopadeva", in *Ramayana, Mahabharata and Bhagavata Writers*. eds. Manee-sh Shingal and Nitima Shiv Charan. New Delhi: Publications Division 1978 (4th Repr.: 2013).
- Sanderson, Alexis
 [2006] "The Date of Sadyojyotis and Bṛhaspati", *Cracow Indological Studies vol. VIII*. KSIĘGARNIA AKADEMICKA Sp. z o.o. 2006.
 [2012-2013] "The Śaiva Literature", *Journal of Indological Studies (New title for Studies in the History of Indian Thought)* Kyoto: Kyoto University 2012-2013.
- Sato, Hiroyuki (佐藤裕之)
 [2005] 『アドヴァイタ認識論の研究』 山喜房仏書林, 2005.
- Shastri, Hari Prasad

[1954] *Panchadasi: A Treatise on Advaita Metaphysics by Swami Vidyaranya*. Tr. London: Shanti Sadan 1954 (Repr.: 1982).

Sheridan, Daniel P.

[1986] *The Advaitic Theism of The Bhagavata Puraṇa*. Varanasi: Motilal Banarsidass 1986.

Veezhinathan, N.

[1972] *The Saṃkṣepaśārīraka of Sarvajñātman*. Ed. and Eng. Tr. Madras: University of Madras 1972 (Repr.: 1985).

<キーワード> Madhusūdana Sarasvatī, Vopadeva, Īśvara, Advaitavedānta

(早稲田大学非常勤講師, 博士 (文学))